
12の魔法物語

翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

12の魔法物語

【Nコード】

N0658X

【作者名】

翼

【あらすじ】

魔法が存在する世界で一人、少年が物語を創る。

0001 零

魔法が存在する世界。

それは、戦争が終わらない世界。

そしてそれは、仲間との絆を大切に作る世界でもある。

人間が体内に魔力を持ち、共に戦い、共に生きる。

その者を『魔術師』とこの世界では呼ぶ。

そして、どの色の魔法を使うかによって、呼び名が違っている。

光、闇、火、水、土、風、岩、氷、星、木、音、心。

この12の魔術が代表的になっている。

そして、この世界の12の国と12の色を結び、物語を編んでいった。

今、新しい物語が始まろうとしていた。

リクレイア・エンゼル。

スターライト
新人の魔星師だった。

001 旅

魔法使いには、必ず旅立ちの日が来る。

旅はきつと仲間と出会ったり、新しい物語を知ったり、様々な冒険をするであろう。

そしてそれは、己の心に残る、永遠の思い出になるであろう。

これは、学校に入学して初めて伝授された言葉だ。この言葉はきつと、永遠になくならない。例え、これから世界が終わるとしても。

*

その少年は、今、旅立とうとしていた。

彼は8の時に魔法を知り、10の時に学校に入学した。スターライト魔星師の称号を貰い、卒業した16歳の少年が、旅に出る。

「リクレイア、杖持った？」

「持った」

「あれは父さんの形見だからね。大切に使ってね」

「分かってるよ、そんな事。それよりこれ、どうやって使うかが疑問なんだけど」

「うん。えっと、こっちは太陽の杖。日光によって使える杖で攻撃用の杖。それで、もう一つの方は月の杖。これは逆に月光がないと使えない。月の杖は防御…と言うより、体力回復、と言った方が良いかな」

「ああ…何となく分かった」

少年は、少し伸び過ぎた髪をゴムで結んだ。

そして、左腕に彫っている星の形見た。

それは、魔星師の証の星の刺青だった。

「母さん、行ってくるよ」

「ええ、行つてらっしゃい。無事に帰つて来なさいね」
少年は母に手を振ると、その場から遠ざかっていった。

*

「ん…地震？」

僕は旅立つ前の日に、何となく目が覚めた。

「なんだ…気のせいかな。興奮してるのかもな…」

僕が旅立ったのは16歳の時だった。魔星師の称号を貰い、専門の魔術師に刺青をして貰った。

刺青の色は、自分自身の決断によって決まる。基本的には三種類あった。研究を基本とする研^{ケン}の称号、世界を旅して他の国の魔法を覚える旅^{リョ}の称号、魔法を活かし、専門の職業に就^{シユウ}就^{シユウ}の称号。しかし、それは誰でも一年間の修行が必要だった。一年後の決断によって、未来が決まる。刺青の職人は、おそらく、就^{スレリット}の魔心師だろうと思つた。それは、緑色のハート型の刺青を肩に入れていたからだつた。研は空色、旅は朱色だった。

このように、刺青の形と色で称号が分かつた。

僕の刺青は星型で、雪の様な白に染まっていた。それは、修行中の印だった。

僕は何となく街の中を歩いて行つた。街には、美容院やペット店、魔機具屋などがあり、賑やかに、話したり遊んだりしていた。魔術師や学生、魔法を使えない人間もいた。

僕が旅立つて最初に会つた知り合いは、幼馴染のアルク・スカーレットだった。

「…あれ？リクレイア？」

僕はきつと、そう話しかけてくれるまで気付かなかつただろう。

「リクレイア・エンゼル…だよな？リクレイアじゃん！超久しぶりい」

「アルク？」

「そっだよ、アルクだよ、アルク・スカーレットだよ。元気にしてる？ん？」

「ああ。アルクも元気だった？」

「勿論！」

最後に会った時と同じ、緋色の髪をポニーテールにして、腰に上着を巻いていた。

そして、最後に会った時とは違う事は、右肩に朱色の炎の形をした刺青がしてあった事。

「お前、その刺青……」

「ああ、これね、つい二日位前に色が変わったの。決断、旅にしたからね」

「魔炎師に成ったのか」

「うん。リクレイアは今年旅に出るんだね」

「ああ。僕は一年飛び級したから。アルクは二年か。相変わらずだなあ」

アルクは運動神経が良い。テストは大体、十分の七は実技能力で三は知力なので、アルクは実技を得意とするのだらう。

「お前、何でこんな所に居るんだよ」

「家族にお土産買おうと思って。お母さん、魔法石集めるの、好きなんだよ」

魔法石とは、簡単に言うと魔力の塊。手のひらサイズの宝石のような玉に炎が燃え上がっていたり、泡が浮いたりしていて、それは属性によって違った。魔法石は普通、自分の魔力を上げる為に使う物だが、時々集める人もいる。

「リクレイアはこれから何処行くの？」

「僕はさっき旅立ったばかりだからな。考える時間も無かった」

「行くあてがないなら彼処行こうよ。いつも行ってた、彼処」

「うん、まあ別に予定とか全く無いから、行くよ」

「やったあ！懐かしいねえ。行くよっ」

そう行つて、アルクはその場所に向かって走り出した。

相変わらず足が速い。
僕も其処に向かって走った。

0021 国

その場所に着いた時、僕は懐かしい空気を吸った。

「久しぶりだね、この公園。相変わらず広いなあ」

僕はそこに行くと、脳の奥に置いてあった記憶が蘇ってきた。

「あ！此处、リクレイアが木登りして落ちた木だ」

「よくそんな事覚えてるな」

「アタシが記憶力良いの、知らないの？」

「ああ、覚えてる。確かお前、8歳で円周率50桁位言えたよな」

「言おうか？」

「遠慮します」

「3.14159265358979…」

「分かった、もう良い」

僕は一つ、息を吸った。

「落ち着くね」

「うん」

僕は空を見上げた。

風に耳を傾ける。

風が、気持ち良い。

そう思った瞬間、遠くで爆音がした。

「アルク、行ってみよう」

「行かないつもりなんて無いに決まってるじゃん！走って行くよっ」

僕はアルクと音を頼りに走った。

その場所は、赤の国。僕の実家がある国は、藍だ。アルクは赤の国で生まれ、育った。

「え…」

僕はその光景を見て、驚いた。山火事だ。けれど、空が黒く、雲からは嵐のような雨が降っていた。

「戦争…」

アルクが呟いた。

「アタシ、何でもこんな戦争が起きてるか、知ってる」

アルクは状況を説明した。

赤の国では百年に一回、鳳凰に火の力を貰う儀式を行う。行う場所や時間はある書に書いてある。儀式を行わなければならないこの時期に、書が行方不明となった。桃の国が書を隠したのではないかと言われ、それを否定する桃の国に益々怪しんだ。赤の国と桃の国は仲が悪い。その後には白の国の有名な予言者に聞こうとした。しかし、白の国はそれを殺そうとしているのではないかと警戒し、赤の国の住民を国に入れようとしない。それに腹を立て、三つの国の中で戦争が起きている。

「全く、そんな事で戦争するなんて呆れるよね」

アルクが溜息を吐いた。

「でも、書を見つけない限り、戦争終わらないからね」

「あれだったら僕は手伝えるよ」

「本当!？」

「ああ。書を見つければ良いんだろ？」

「うん、そう言う事。有難う!リクレイアは北の半分の情報集めて!お願い」

「おし!行つて来る」

この世界に、12の国がある。

色と魔術を結びつけ、夫々その国で習う基本魔法としている。

白の国、風の使い。

桃の国、音の使い。

赤の国、火の使い。

橙の国、土の使い。

黄の国、光の使い。

緑の国、木の使い。

空の国、心の使い。

青の国、水の使い。

藍の国、星の使い。
紫の国、氷の使い。
灰の国、岩の使い。
黒の国、闇の使い。

これらがこの世界の12の国だ。

意味が無さそうな物もあるが、この中の一つが欠けると世界が壊れると言う伝説もある。

それくらい、昔から大切にしてきたと言う事だ。

この世界には数え切れない程の魔法がある。僕はその中でも移動系の魔法は取得していない。

これからどのようにして情報を集めるかだ。

移動系魔法スピードが使えないと、各国から情報を集めるには相当の時間がかかる。僕は、とりあえず一番近い国、白の国に向かった。

街に着いた時、僕は辺りを見回した。移動系の魔法屋を見つければそれは一番良い。けれど、辺りに移動系魔法を売る魔法屋は無かった。僕は周りにあつたただ一つの魔法屋に入った。

「すみません、僕はこの辺りで移動系の魔法を探しているのですが」

「すまんな、ボウヤ。此処シールドには移動系魔法は売っておらんのだよ。」

此処は防衛系専門店だからね」

「それなら、この辺りに移動系魔法専門店はありますか」

「そうだねえ、おらの知り合いが一人、隣街で魔法屋を営んでいるなあ」

「そうですか。有難う御座います」

僕は隣街に向かって歩き始めた。

「ああ、この店には幾つか星宝石スタージュエルがあるよ。見て行くかい？」

この店は移動系と攻撃系アタックの専門店だった。

「はい、お願いします。幾らしますか」

「ん…15000レカ、かな」

「……」

僕の財布には100000レカが入ってる。

「ほら、持ってきたよ。どれが良いかい？」

そこには鳳凰座のフェニックス、鶴座のグルス、風鳥座のアプスが
あった。

「フェニックスは少し高いけど、攻撃技も出来るし、お得だよ」

「…なら、フェニックスをお願いします」

「20000レカだよ。買うかい？」

僕は店員に20000レカを渡して、星宝石を受け取った。

「毎度あり！気を付けるんだよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0658x/>

12の魔法物語

2011年11月11日10時38分発行